

IgG はいずれも正常人血漿中の RCo 活性を抑制した。DDAVP 投与にて VIII 因子はいずれも増加したが、RCo のみ血中よりすみやかに消失した。CIE では large multimer の減少を認め、DDAVP 投与により改善した。PV に後天性 von Willebrand 病 (AvWD) と storage pool 病を合併した症例を報告した。AvWD の機序に関しては患者 IgG の関与が示唆された。

4) 抗 D モノクローナル抗体を用いた ELISA 法による血中 FDP の定量

吉野 紀子・高桑 悦子
滝沢慎一郎・花野 政晴 (新潟大学第1内科)
高橋 芳右・柴田 昭

FDP の測定は、フィブリノゲンあるいは、種々の FDP 分画に対する特異抗体を用いたラテックス凝集反応による半定量法が繁用されているが、この度、FDP-D 分画に対する特異抗体を使用し、血中の FDP を定量するキットが第一化学薬品より開発されたので、その紹介及び2,3の検討結果を報告する。

- 1) 原理, 方法: 抗 D モノクローナル抗体を用いた ELISA 法 (immunoenzymometric assay) である。
- 2) 検量線: 逆 S 字状の曲線となり、0.25 以下は測定限界と思われた。
- 3) 正常値: 健康人21名で検討した結果、 $0.25\mu\text{g/ml}$ 以下を $0.25\mu\text{g}$ として計算すると、平均値は $0.54\mu\text{g/ml}$ であった。
- 4) 血清と血漿との相関: 相関係数 $r=0.995$ ($n=74$)
- 5) ラテックス凝集法との相関: 血清では相関係数 $r=0.558$ ($n=84$)、血漿では相関係数 $r=0.395$ ($n=74$)
- 6) UK 投与前後による FDP-D の変動: 血栓症患者4名に UK を投与し、その前後で FDP-D を測定した結果4名とも前より後の方が高値であったが、投与直後に測定する方がより高値傾向にあった。
- 7) まとめ: 血漿と血清との相関性が高いことから、フィブリノゲンと交差反応がほとんどないと考えられ、血漿での測定が十分可能である事と、定量できる点は、注目するところである。反面 ELISA 法であるため簡便性、迅速性の面で問題があり、ルーチン検査用としてではなく、研究的方面での利用が有用と思われた。

北日本脳神経外科連合会

第10回学術集会

日時 昭和61年5月9日(金)~10日(土)

会場 石川県教育会館

一般演題

1) MRI による頭部外傷例の検討

福田 修・佐藤 秀次 (金沢脳神経外科病院)
鈴木 尚 (富山医科薬科大)
遠藤 俊郎・高久 晃 (学脳神経外科)

頭部外傷の診断における MRI の利点を、CT と比較検討し報告した。

対象: 25症例36病変(脳挫傷11, 急性硬膜外・下血腫9, くも膜下出血6, 硬膜下液貯溜3, 脳内出血1, 慢性硬膜下血腫6), MR 機種は0.15 T 常電導型 (Picker 社製)。パルス系列は SE 2000/80, IR 2000/500。

結果: MRI でのみ診断できたのは13病変(36%)。内訳、脳挫傷5, 急性硬膜外・下血腫4, 硬膜下液貯溜2, 慢性硬膜下血腫2。これらの病変はいずれも頭蓋底部、彎隆部の骨に接した小病変であり、 T_2 -weighted SE 像が有用であった。また CT 上 isodense の慢性硬膜下血腫も MRI で容易に診断できた。以上、MRI は、外傷性頭蓋内病変の検出および拡がりを知る上で CT よりも優れていた。

2) traumatic scalp A-V fistula の一例

佐藤 和彦・八木 直幸 (鶴岡市立荘内病院脳神経外科)
斎藤伸二郎 (山形大学医学部脳神経外科)
中井 昂

症例は33才の男性。16才頃友人にこぶしで左後頭部を殴打され、頭皮下血腫を形成、2~3カ月後には消退したが、約1年後から同部位の柔らかい腫瘍の出現に気付いており、徐々に増大、拍動感を自覚する様になった。

初診時、外後頭隆起の左側に心拍に一致した。雑音を聴取し、同部の圧迫で皮下腫瘍は縮小した。脳血管写では左後頭動脈から拡張蛇行した血管が造影された。昭和60年11月26日、部分摘出術を施行し、その後の経過は良好であった。本疾患は本邦で20例の報告があるが後頭動脈を流入血管とする例は、本例を含めて4例にすぎず、又、罹病期間が最長で、最も大きな腫瘤を形成した症例と思われたので報告した。